



| | |
|--------------|---|
| Title | 本邦における糖尿病剖検例の死因について |
| Author(s) | 建石, 龍平 |
| Citation | 大阪大学, 1965, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/28757 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | |
|-------------|-------------------------------------|
| 氏 名・(本籍) | 建 石 龍 平 |
| | たて いし りゅう へい |
| 学 位 の 種 類 | 医 学 博 士 |
| 学 位 記 番 号 | 第 6 9 2 号 |
| 学位授与の日付 | 昭 和 40 年 3 月 26 日 |
| 学位授与の要件 | 医 学 研 究 科 病 理 系 学位規則第 5 条第 1 項該当 |
| 学 位 論 文 題 目 | 本邦における糖尿病剖検例の死因について |
| | (主査) (副査) |
| 論 文 審 査 委 員 | 教 授 宮 地 徹 教 授 岡 野 錦 弥 教 授 吉 田 常 雄 |

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

糖尿病は外的環境因子に大きく左右される疾患で、我国では、欧米諸国に比して少ないとされているが、戦後食糧事情の改良と共に糖尿病患者は著しく増加している。然しながら、現在のところ我国における糖尿病患者の死因、合併症について分析した報告は見当らない。そこで私は、1954 年から 1963 年に至る 10 年間に解剖された糖尿病例 154 例について死因及び心臓、腎臓合併症の統計的な分析を試み、併せて対照例のそれとの比較検討をした。

〔方法並びに成績〕

剖検材料は、全国 28 大学病理学教室、広島 ABCC、及び、3 病院において剖検されたもので、全例 154 例（男 72 例、女 82 例）について剖検記録、臨床記録を検討し、更に全症例の腎組織標本を検索した。対照例は、広島 ABCC において、1961 年から 1963 年迄の 3 年間に剖検された非糖尿病例 1,128 例を選んだ。

糖尿病例の死亡年令分布は、男女共 60 才代が最も多く、50 才以上が 75% を占める。発病年令は、男女共 50 才代で発病するものが多く、40 才以下で発病するいわゆる若年性糖尿病例は、27% であった。

1) 死 因

昏睡及び感染症： 昏睡及び感染による死亡は 60 例（39%）で、このうち重篤な結核又は他の感染を合併しない昏睡死 12 例にみられた。感染死は 48 例で、結核が最も多く 16 例、腎盂腎炎 12 例、気管支肺炎 6 例、その他の化膿性炎症 14 例であった。

血管合併症： 糖尿病例の血管合併症による死亡は 57 例で 37% を占め、そのうち腎血管障害が最も多く 26 例、心血管障害 19 例、脳血管障害 9 例、下肢脱疽 2 例、蜘蛛膜下出血 1 例であった。

これに対し、非糖尿病例では脳血管障害が最も多く、次いで心血管障害、腎血管障害であった。脳出血死を年代別にみると40, 50才代で糖尿病例0%, 非糖尿病例5.3%であり、60, 70才代ではそれぞれ、5.3%及び8.1%となっている。心筋梗塞の頻度は、糖尿病例では40, 50才で10.4%, 60, 70才で16.0%であり、非糖尿病例では2.1%及び6.2%であり、40, 50才代では糖尿病例が非糖尿病例の約5倍、60, 70才代で約2.5倍の頻度にみられた。

2) 糖尿病性糸球体硬化症の頻度

糖尿病性糸球体硬化症の合併率は61.7%であり、年齢別では20, 30才代で40.6%, 40, 50才で68.8%, 60, 70才代62.7%に合併を認め、男女別では男54.2%, 女65.9%であるが、20, 30才代では女性に経過年数の長い症例が多くを占める事を考慮すれば、男女に頻度の差は著明ではない。糖尿病性糸球体硬化症と経過年数との関係は、5年以下では約50%, 5年から9年では70%, 10年以上では91.4%に合併をみた。更にインシュリン投与との関係では、インシュリン無投与例でも51.8%に、投与1年以内例でも60%に認められ、その関係は明瞭ではない。

〔総括〕

日本人糖尿病剖検例154例、対照例1,128例について検討し、次の結果を得た。

- 1) 死因では血管合併症37.0%, 次いで感染死31.1%, 昏睡7.8%であった。
- 2) 感染では結核10.4%, 腎盂腎炎7.8%であり、対照例と比較してそれぞれ2倍及び6倍の頻度であった。
- 3) 血管合併症は、腎血管障害16.9%, 心血管障害12.3%, 脳血管障害5.8%で、対照例では脳血管障害10.3%, 心血管障害6.0%, 腎血管障害0.7%であった。
- 4) 心筋梗塞を合併する頻度は、対照例に比して、40, 50才代で約5倍、60, 70才代で約2.5倍であった。
- 5) 糖尿病性糸球体硬化症を合併する頻度は男54.2%, 女65.9%であった。
- 6) 糸球体の変化はインシュリン治療と関係なく、経過年数との関係が深い。

論文の審査結果の要旨

わが国の糖尿病患者数は、近年生活条件の変化と共に著しく増加している。しかし糖尿病患者の死因及び合併症について多数の剖検例に基づいて分析した報告は未だない。本論文は糖尿病剖検例154例の死因及び主な合併症につき分析したもので、死因では血管合併症死が最も多く、次いで感染死、昏睡死の順であり、血管合併症死では腎不全によるものが最多である成績を得ている。この成績を糖尿病治療の進んでいる米国の報告と比較し、本邦では昏睡、感染死が高率で、糖尿病患者の管理不全を指摘し、更に糖尿病性腎硬化症の高率なことも、Controlの不良に関係している可能性を示している。以上の事は現在の糖尿病患者の管理のあり方に反省を求め、今後適切な管理により、わが国糖尿病患者の上述の合併症による死亡を減少させ得ることを示唆している。